

Y4-29

脳卒中医療の向上を目指して 脳卒 中地域連携パスの県内共通化

前橋赤十字病院 脳神経外科¹⁾、
前橋赤十字病院 地域連携課²⁾、
前橋赤十字病院 医療社会事業課³⁾、
前橋赤十字病院 看護部⁴⁾、
前橋赤十字病院 リハビリテーション科⁵⁾
朝倉 健¹⁾、須賀 一夫²⁾、中井まさえ³⁾、
笹原 啓子⁴⁾、田中真理子⁵⁾

【はじめに】平成23年度群馬県における脳卒中地域連携クリニカルパスは全県で共通化された。その経緯、今後の課題について報告する。

【これまでの経緯】平成19年2月に関連するリハ病院と共に設立した「前橋日赤脳卒中医療連携の会」によって脳卒中地域連携クリニカルパスを作成し、平成20年4月から運用を開始した。その後徐々に参加病院が増加し、平成21年10月に「群馬脳卒中医療連携の会」に発展した。年4回の全体会を行い、そのうち1回は群馬県中の脳卒中医療連携にかかわる方々に声をかけて講演会と懇親会を開催した。連携パスの改良はworking groupで検討を重ね、平成21年度にパリアンスシートの改訂、平成22年度にはオーバービュー、看護師の記載する連携シート、同意書を改訂した。異なるパスを用いていた他地域の病院スタッフと協議を重ね、「群馬脳卒中医療連携の会」で運用してきたパスの改訂作業と共に、平成23年度に県内共通化されることとなった。

【課題】「群馬脳卒中医療連携の会」が拡大すると共に、個々の地域の病院間における顔の見える連携が希薄になってきた感があるのでさらに工夫をしたい。維持期連携は地域に密接した多職種に渡る地道な協議を続けていきたい。入力を容易にし、データ分析を行いやすくするためのパス電子化についてはworking groupで協議進行中である。

【結語】脳卒中地域連携パスの群馬県内共通化が完成した。脳卒中医療の向上を目指してさらに一歩ずつ連携を深めていきたい。

Y4-30

地域連携システムを用いた旭川大腿骨 頸部骨折地域連携パスについて

旭川赤十字病院 事務部 医療情報課¹⁾、
旭川赤十字病院 副院長²⁾、
旭川赤十字病院 整形外科³⁾
齊藤 友紀¹⁾、牧野 憲一²⁾、小野沢 司³⁾、
小松比左志¹⁾、山田 浩貴¹⁾、中村 容子¹⁾、
橋本由美子¹⁾

【はじめに】当院は一般病床560床の地域医療支援病院であり、電子カルテと地域連携システムを導入している。地域連携システムはセキュリティを確保したインターネットを利用し、オンライン上で運用している。当院の地域連携パスはこのシステムを利用しており、院内外から閲覧・入力ができるため円滑な連携が可能である。本発表では旭川大腿骨頸部骨折地域連携パスの特徴と導入後の変化を報告する。

【特徴】情報の共有・効率化を図るため、オーバービューシートをExcelにて作成した。各職種（医師・理学療法士・薬剤師・看護師など）が同一のシートに入力し、これを転院時の情報提供書とした。記載項目は回復期病院と合同で開催する旭川大腿骨頸部骨折地域連携委員会で検討し、ADL評価はFIMを採用した。回復期病院はこのパスシートを転院前に閲覧できるため、早期より患者の状態を確認し受け入れ態勢を整えられることとなった。また、回復期病院は入力を継続し当院へ情報をフィードバックするため、当院は患者の経過を把握することが可能となり、さらにデータを容易に集計・分析することができるようになった。

【導入後の変化】2009年12月から2011年4月までにパスを用いた転院が105件あった。当院の平均在院日数は22.0日から16.8日に短縮、外来通院は20.0%から6.0%に減少、病院への転院が63.7%から78.5%に増加した。回復期病院からは「詳細な患者情報が一枚のシートに書いてあるので把握しやすい」、「スムーズにリハビリへ移行できる」などの声が寄せられている。集計データからは当院転院時FIM60点以上の患者は回復期病院を自宅退院する傾向がみられ、目標設定の指標となることが期待される。